

# 境界を越えて

## アノーチャ・スウィチャーゴーンポン監督 The Line をめぐって

平松 秀樹

### The Line あらすじ

映像制作者のリカは最新作のメコン川に関する作品の展示（展示名にはドイツ語でAlle Pferdeとある<sup>1)</sup>）を予定している。会場で設置準備を進めているが、画像のコントラストなどいくら男性係員が調整してくれても、どれもしっくりこない。映像展示の企画を担当する会社のスタジオ・オフィスでは女性スタッフであるキムと同僚の男性が作業中だが、そこに若いインターンの女性が登場する。キムが見ているパソコンに、今朝巨大な何かが捕獲され、4年ぶりに発見されたとの情報が載っていた。それを見たインターンは、その場所は自分の故郷バーン・チエン<sup>2)</sup>だと言う。

結婚した親友がキムを訪ねてきて、二人で休憩しながらタバコを吸っている。近況話はしばらく続くが、リカが来たときインターンがキムを呼びに来る。展示スタジオでリカと話をしているキムは、何か変えたいところがあれば今日中ならできると言う。大航海時代の西洋服を着た男性が精密な地形図を持って現れ、メコン川のほとりで測量のようなことをしている。インターン女性がオフィスのキッチンで物思いに沈んだ顔でいる。両手にはコーヒーカップ、腕にはかなり大きな円い時計。キッチンに備え付けられた複数のステンレス器具がゆっくりと順番に映し出されていく。

### はじめに

本作品では、以下の4つの主要要素が組み合わされている。アノーチャ・スウィチャーゴーンポン監督の作風でもあるが、4つの要素は必ずしも直接響きあうものではないものの、全体で一つのテーマに収斂していく<sup>3)</sup>。一つ一つのエピソードが一見断片的であって、監督はそれについて多くを語らず、観客に自由な解釈を与えている。その結果、多くは謎のまま

様々な解釈が成り立つ。

- (1) リカという名の女性アーティストと彼女が制作した作品
- (2) 展示を請け負うオフィスの女性とその友人との会話
- (3) 上記オフィスのインターン女性
- (4) 大航海時代の西洋風の軍服を着た男性（この部分はリカ制作の映像作品の一部であるとも考えられる）

アノーチャ監督は、この作品について次のように語っている。

この作品によって、実証科学の一つでもある、メコン川のエコロジーについてのこれまでの支配的な言説を打ち破りたいと思っている。本作では、メコ

1) この展示名の意味の説明は出てこない。「すべての馬は同じ色」というパラドックスの言い回しと何らかの関係があるかもしれない。そうである場合、万物を同じ尺度で測ることへの警鐘とも考えられる。

2) ラオスの対岸に位置するタイ東北地方のノンカーイ県に接したウドンターニー県にある。紀元前の独自の文明を示す古代の土器が見つかり、バーン・チエン遺跡として保存されている。1996年にユネスコの世界文化遺産に登録された。

3) 日本の映画祭でも上映された『暗くなるまでにも』(2016)でもこの手法がとられている。

ン川やそれを取り巻く環境問題を、アニミズムの観点から問い直す試みがなされている。みなさんには、メコン川のエコロジー問題を今までと全く違った方法で、批判的な思考によって検証していただきたい<sup>4)</sup>。

タイの社会と文化を研究してきた立場から本作を読み解くことで、アノーチャ監督の試みに応えてみたい。

## 1. リカの制作映像

本作品の冒頭に流れるリカ制作の映像のナレーションは中国語で行われる。空と川が映し出されるが、注意してみると上下が逆になっているのがわかる。下に位置するのがクリアな画像の空で、上にあるのがその空を水面に反映した川である。上下を逆にしてみると真実の姿が映るといふ<sup>5)</sup>、まるで、冒頭で観客のこれまでの思考を覆すよういきなり挑発しているかのようだ。上にあるものが実は下であり、境界 (Line) を軸に上下が逆転するというのは暗示的で、最後まで一貫して本作品の基調をなしている。

ナレーションは「みなさんに伝えたいことがあります、それは言葉ではうまく言い表せないものです」と語り始める。途中で一旦場面が展示スタジオに移るが、再びリカの作品映像に戻り、高層ビルが立ち並ぶバンコクの街中をBTS高架電車が走り過ぎていく図が映し出され、「これが私の家族の照片 (写真) です」と続く。「そこに私があります。注意深く見ればわかりますよ」という言葉とともに現れる画面の中心にあるのは、建造が途中で止まったままの高層ビルである。この聳え立つ廃墟が含意するものは、挫折してしまった開発の姿、物質的近代化の儂さ、とでもいえる。ナレーションが中国語であることを考慮に入れば、このビルは中国資本による開発であったのかもしれない。

4) Mekong 2030 プレス・キットによる (MEKONG 2030 Press Kit.pdf)。

5) 何回も映画化されている有名な「メーナーク・プラカノン」の逸話では、顔を下げて自分の股の下から覗いてみると、幽霊 (メーナーク) の正体が判ることになっている。こうした現象は日本でも、いわゆる「股のぞき」として知られている (常光 2006)。

「その日のことは鮮明に覚えています。泳ぎに行くとともに食べ、ともに語りました」。「その日以来、私は消えて、人々の目に見えなくなってしまいました」とも語られる。非常に暗示的である。「私」とその家族は、無謀なダム開発によって消えてしまったのだろうか。また、制作者のリカは自分の展示作品の映像の明るさやコントラストをどう調整してもすべて気に入らないと言うが、それは、どんなに映像をクリアにしても、川自身の本来の輝きが開発によりすでに消え失せてしまっているため、気に入らないとも考えられる。

リカはメコン川を対象とする作品を制作撮影した動機として、ベルグソン流の歴史、時、durationの否定を持ち出す。durationはすべてを測る手段であり、スペースまでも年月分秒として測ってしまうが、自分が検証したいのは、そうした科学的基盤とは相克する、それに代わるものとしての、もっと主観的な、object oriented ontologyとアニミズムの関係に着目して物事を捉え直すことだ、と主張する。そして、「我々タイ人がもともと持っているものであり、物質には魂が宿っているという考えもその一つだ」との見解を提示する。アノーチャ監督によるベルクソン理解にどれくらいの整合性があるのかはここでは置いておこう。確実に言えることは、見えないLineを軸にした価値観の転換がここでも示唆されていることである。すなわち、客観性を重視する西洋科学の行き詰まりを解消するための智慧として東洋的アニミズムを提示して対峙させているのである。

## 2. キムと友人の会話

キムと友人がタバコを吸いながら会話するシーンは、作品全体の時間を考えるとかなり長めである。2年の準備期間を経た今回の展示は大成功だねとキムは友人に称賛される。キムはタバコをやめられない友人に「何も変わってないね」と言い、友人は「子供ができて何もかも変わったよ」と答える。二人の会話はインターンが呼びに来て打ち切りとなる。一見何の変哲もない会話シーンだが、我々の生活はすべて、自らが作り出した時間に逆に支配され制限されており、決して時間の支配者にはなれないというメッセージとも解釈できる。

旧友と話をしながらタバコを吸うキムの姿はどこから疲れて寂しそうに見える。キムにとっての2年間は仕事で成功を収めるために諸々のものを犠牲にした時間であったのかもしれない。友人がいうような華やかなビジネスの成功が、プライベートでは必ずしも幸せをもたらさず、何か大切なものを失ってしまったのかもしれない。常に時間と闘いながら生きていかねばならない都会のビジネスライフは、こちらの平安にはつながらない。キムの姿は、後輩のインターンがこれから辿っていく途を暗示しているようにも思われる。一方、キムの友人はタバコをやめられないのは以前と同じだが、この2年間で多くのことが変化したと答える。結婚して義母と過ごさねばならぬ時間、そして、とくに子供ができてそれが生活の中心となり、すべての時間が制限されるようになった。今も子供を迎えにいかねばならないので、会話も終わりにしなければならぬ。彼女にとっての生活は、常に時間に支配されて自由ではないように感じている。さらにこのシーンの締めは、インターンが呼びに来て会話の終了を促す。最後まで時間に追われる現代人の姿を描いた一コマである。

### 3. アニミズムの勝利

本作で、単純ではあるが最も大きな一つの謎が残る。4年ぶりに発見されたという「物体」は一体何かという問題である。インターン女性<sup>6)</sup>は、それが見つけられた場所であるバーン・チエンは自分の故郷であり、しばらく帰っていないと懐かしそうに説明する。キムは自分も行ったことがあり、美しい場所だと返す。同僚の男性は「それは本物かな」と尋ねる。メコン川でしばしば「発見」されて話題になるのは巨大ナマズだが<sup>7)</sup>、本作ではその物体が具体的に何で

6) 埃一つないモダンなオフィスにインターン女性が庶民的なバイクタクシーの後ろに乗って登場するコントラストが面白い。小奇麗で洒落たこのオフィスが現れるシーンでは優雅な西洋クラシック音楽が必ず挿入される。

ところで、インターンはMRT(地下鉄)に問題があったのでオフィスに来るのが遅れたと言いつづけているが、これは本当だろうか。オフィスの二人は新人が遅れてきたことを全く気にする様子もない。遅刻の「伝統的」な言い訳としては、「渋滞した」あるいは「雨が降って洪水だった」が多く、そう言うのと大抵は許されてきた。いくらオフィスが近代化しても遅延に寛容な伝統的気質が変化していないのも興味深い。

7) 4年ぶりの「発見」というここでは場所的に古代土器を考え

あるかを明らかにすることにはそれほど意味がない。メコン川沿いの故郷で4年ぶりに発見されたものは、インターン女性の中にあり、同時にすべてのタイ人のところの中にもあるはずの「美しい」ものである。それは、こちらの故郷であり、古き良き時代の事物の象徴であると解釈できる。

最後に、インターン女性がオフィスのキッチンで、コーヒメーカーから入れたコーヒーを白のカップで飲みながら物思いに耽っているシーンが映される。右腕に嵌めた大きなまん丸の腕時計が印象的である。銀色で塵一つないびかぴかのステンレスの器具に囲まれたキッチンが長回しで映されて本作は終了する。最新の設備ではあるが無機質なステンレスに囲まれた台所と、物思いに耽るインターン女性。それは、近代的物質文明と古き良き精神的な故郷との対比である。同時に、彼女は物質的には腕に嵌めた時計に支配されているが、メコン川の故郷を追慕するところは自由である。これらに暗示されるのは、三たび、見えないLineによって区切られた上下の価値観の逆転の構図である。ここでは物質では測れない精神性の優位が示唆されている。

インターン女性はまた、本作の中盤で、オフィスの一角に切らずに残された大きな木にワイ(合掌)している。日本でも古い大木は霊験あらたかとされるが、タイでも、たとえ都会の真ただ中にある木であっても、切り倒すことなくそこに宿る精霊を丁重に祀る。このシーンは、監督が意味する「アニミズム」のかなり直接的な表出だが、同じような例がもう一つある。リカが「作品に変えたい部分があるなら、今日中なら間に合う。どうする?」とキムに言われるシーンだ。「私にもわからない」とリカはしばらく決断できず、行き詰った様子である。沈黙のあとにキムはリカに「古い師にみてもらいにいく?」と尋ねる。ここで表されているのは、インターンの腕時計と同じく、「今日限り」という常に時間に支配されざるをえない現代人の物理的制限と、最後には古い師などの超自然のパワーに委ねる心性である。これも監督のタイ

るかもしれないが、「チャップ」(捕獲)という言葉を使っている。その可能性には疑問符が付く。なお、メコン川上流からの汚染物質で、巨大ナマズを始めとする生態系が大きく崩れていることが、地元の人々の間でつぶやかれている。また、ダム開発による弊害の報告もある(WWFジャパン報告書「ダム開発がメコン川の巨大魚を脅かす」参照)。

的「アニミズム」の表出と考えられる。行き詰った際の最終手段として、あるいはビジネスから結婚などのプライベートな問題に至るまで、人生の大きな決断を占い師に委ね、そしてその占いによって結果として救われ成功しているタイ人は多い。

org/wp-content/uploads/2020/02/MEKONG-2030-Press-Kit.pdf〉(Mekong 2030プレス・キット、2021年1月11日最終閲覧)

WWF ジャパン「ダム開発がメコン川の巨大魚を脅かす」〈<https://www.wwf.or.jp/activities/activity/3393.html>〉(WWF ジャパン、2021年1月11日最終閲覧)

## おわりに

---

「メコン2030」のプレス・キットにある「The Line」の作品内容の説明文には、「あるアーティストがアニミズムと川の生態系に焦点をあてた新しい展示の準備をしていて、芸術作品と現実世界の様々な境界が融合して、新たな知の領域が顔をのぞかせる」とある。アニミズムが本来いかなるものを指すかという問題は別にして、アノーチャ監督は、既成の生態系理論ではなく、それにとって代わる自身の理解する「アニミズム」の体系によってメコン川の環境保全の問題を捉え直すことを提示した。アノーチャ監督の提示する新しい領域の極北に位置するのは、男性がメコン川にワイ（合掌）をする姿である。大航海時代の西洋人服に身を包んだこのタイ人は、最後は精密な地形図を放擲して、川に対してただ合掌する。測量空間や月日などの時間はあくまで人間の観念によって区切られたものであって、それとは関係なしに自然は存在するのである。そこにあるのは、もはやあらゆる観念的理論付けが無益となった、謙虚で敬虔な信仰の姿である。近代的知とアニミズム的信仰の対峙。ここでもまた、見えないLineを軸に価値観の転換が行われている。本稿の冒頭で述べたように、これが断片的なシーンを結び付ける作品全体を貫くテーマとなっており、映像の最初に本作のタイトルであるThe Lineの文字の真ん中に横線が入っている理由はここにある。

## 参考文献

---

常光徹 2006 『しぐさの民俗学——呪術的世界と心性』ミネルヴァ書房

## 参考Website

MEKONG-2030-Press-Kit.pdf 〈<https://mekong2030.org/wp-content/uploads/2020/02/MEKONG-2030-Press-Kit.pdf>〉